



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人代表 加藤 誠
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

「 出会い、学び、繋がる... 」

佐々木 和之
ささき かずゆき

平和構築専攻の新入生

- 今年度は南スーダンからも

昨年10月、プロテスタント人文社会科学大学（略称ピアス）の新年度が始まりました。平和構築専攻の新入生は26名！これまでで最高です。新入生増加の要因としては、奨学生の数を増やしたことが影響していることは間違いありませんが（17名が奨学生として入学）、ルワンダで唯一、学士課程で平和学を専攻できるピアス「平和紛争研究科」の知名度が上がってきているのかもしれません。

現在、平和紛争研究科には74名が所属していますが、そのうちの21名は留学生です。昨年までは、ブルンジ、コンゴ民主共和国、タンザニア、日本の4ヶ国からでしたが、今年初めて南スーダンから留学生を迎え入れました。シリロ・チョル・マシャルさんという29歳の男性です。南スーダンは、現大統領と前大統領の権力闘争、民族間の対立、石油資源や武器輸出等の経済利権が複雑に絡み合う中で、政府軍を含む複数の武装集団が自分たちと民族が異なる一般市民を虐殺する事件が続いています。

ピアスでは4年前から、ルワンダを含む「アフリカ大湖地域」において、国境を越えて平和

のために働く人々のネットワークを構築していくことを目的に、ルワンダ周辺諸国の若者たちを奨学生として積極的に迎え入れています。今年度は、5カ国から計24名の応募があり、その中からマシャルさんを含む5名が入学しました。

ルワンダで活動を始めた当初は、私が南スーダンの人たちと直接関わることになるなど考えてもみないことでした。マシャルさんがピアスに来てくれたことにより、南スーダンがこれまでの「遠い国」から日々身近に接する学生の出身国になりました。来年もぜひ南スーダンから、出来ればマシャルさんのディンカ族と対立関係にあるヌエル族出身で、神様から平和のために働く決意を与えられている青年を留学生として受け入れたいと願っています。

対立する諸民族や国々から集まってきた若者たちがそこで出会い、共に平和と和解について学んでいくことは、私がピアスを通して取り組んでいる平和構築活動の大切な柱です。アフリカ諸国の留学生を受け入れるための奨学金は、私が日本に帰国した際にさせていただいているルワンダの物品販売からの収益金と、この活動を特別に覚えて献げてくださった支援金によっ

て賄われています。これまでの皆さまのご協力に心より感謝いたします。私たちに出来ることはとても小さいですが、その一つ一つを主イエスが結び合わせてくださり、主の平和のために用いてくださることを信じ、この一年も歩いていきましょう。



(南スーダンからの留学生、マシャルさんと)

キレへ養豚組合訪問記

12月3日から4日の二日間、嬉しいお客さんと一緒に養豚組合があるルワンダ南東部のキレへ郡を訪ねました。「嬉しいお客さん」とは、2014年の約1年間、日本人留学生第一号としてピアスで学んだ加藤麗さん。加藤さんは、東京外国語大学を卒業後、NHKに入局し、新進気鋭のディレクターとして番組制作に関わっておられます。その加藤さんの企画・監督で、NHKが私の活動に関するドキュメンタリーを制作してくださることになり、彼女はその準備のためにルワンダを再訪されたのでした。

カブゾ村とルガンド村にある養豚協同組合を訪ねたのは、昨年9月、「和解の現場」訪問ツアー以来のことでした。前号でお伝えしたように、2015年12月末の支援終了以降、これら二つの養豚組合は自立経営を進めています。しかし、9月以降、本来なら雨が降るべき時に日照りが続いたため、飼料価格が高騰しているばかりか、補助的な飼料として重要な青草、サツマ

イモのツル、野菜クズなどが不足し、組合のリーダーであるセルディヨさんやタデヨさんは頭を抱えていました。特に、ルガンド村では栄養不良のために体力を落としていた親豚5頭が死亡するというとてもショックな出来事がありました。支援の手を差しのべたいのはやまやまなのですが、外部からの援助への依存体質助長を避けるため、REACHと対応を協議しながら、慎重に見守っているところです。ようやく雨が降り出したことで、状況が好転することを祈らずにはおれません。

ニャンザお花畑プロジェクト

ピアスから北方に車で40分ほどのニャンザ郡で、一昨年から切り花作りに取り組んでいる女性グループ「ウムチョ・ニャンザ(ニャンザの光)」のその後についてお伝えします。既にお伝えしたように、ウムチョ・ニャンザは「癒しと和解セミナー」に参加したジェノサイドの生存被害者である女性たちと加害者を家族に持つ女性たちの協働グループとして結成され、昨年4月のジェノサイド犠牲者追悼式典では、失われた仲間の家族のために共に育てた花を献げました(ウブムエ35号参照)。

昨年7月には、前回花を育てた畑の球根の一部をより肥沃で水の便が良い谷合の土地に植え直すために0.2ヘクタールの土地を確保し、8月から堆肥を漉き込む作業を始めていました。しかし、そこでのトウモロコシ以外の作物の栽培を禁止する指令が政府から出されたため、当初の計画を断念せざるを得ませんでした。その後、11月になってようやく新たな土地を借り入れて、球根の移植作業に着手したのですが、雨不足のために一時中断していました。しかし、今年の1月下旬から本格的な雨季に入ったため、やっとその作業を再開することができました。先日は、ピアス・ピースクラブの学生たちがドイツからの短期留学生と共に女性たちを訪ね、

畑に堆肥を漉き込む作業を手伝い、その後、直接彼女たちからお話を聞くなど、良い交流の時間が持たれました。



(女性たちと一生に堆肥を畑まで運ぶ学生たち)

「和解の理論と実践」講義

年明けから週にほぼ3回のペースで「和解の理論と実践」という講義を続けていましたが、先日無事に終了しました。今回は、平和構築専攻の4年生10名(ルワンダ人、コンゴ人、ブルンジ人)、ピアスと協力関係にあるドイツの大学からの短期留学生6名、ピアスで英語教師をしているアメリカ人、そして日本人留学生4名が参加しました。今回の講義で感じたことをいくつかお伝えします。

まず第一は、「和解」という問題が、国・地域や文化を越え、私たち人間にとって大切なテーマであるということです。講義ではルワンダにおける癒しと和解の取組みについて中心的に学びましたが、参加者の出身国であるその他の国々でも、民族、宗教、政党等を異にする集団間に深刻な亀裂があることを確認しました。アフリカの外から来た参加者の多くは、講義の初めの頃には、「和解」を他人事として捉えているようでした。しかし、徐々にそれが自分たちの国や地域の問題であることに気付きました。例えば日本の学生たちは、戦時性奴隷である「従軍慰安婦」に関する「日韓合意」にまつわる問題

や、在日コリアンへのヘイトスピーチの問題について自主的に学びました。日本の私たちが過去のアジアにおける植民地支配と侵略戦争の罪責にきちんと向き合うことができず、和解への道のりを本当には未だに踏み出せていないという現実気付くとともに、市民として何をすべきかについて議論し、発表しました。

今回は、前号でもお伝えしたキレヘ郡ルガンド村のサベリアナさんとタデヨさんを2年ぶりにお招きし(去年はカブゾ村からジョンさんとセルディヨさん)彼らが続けて来られた和解への歩みについて、学生たちに直接語りかけいただきました。ジェノサイドで直接被害者・加害者という関係なったお二人のお話は、あまりに衝撃的で容易に信じ難いことであると感じた学生たちもいましたが、彼らのうちの多くは、お二人が自然に触れ合っておられる様子を見て、和解が本物であると感じたとのことでした。私自身、講義の後の食事の時に、片手が不自由なサベリアナさんのために、タデヨさんがナイフで肉を切り分けて彼女のお皿に入れてあげていたこと、そして、彼女が彼の行為を自然なこととして受け入れている様子を目の当たりにして、新たに感動を覚えました。



(サベリアナさんとタデヨさんを迎えての特別講義を終えて)

また今回は、私も知らなかった嬉しいニュースをお二人が伝えてくださいました。それは前号にお伝えしたオスカルさん(サベリアナさんの甥)とクローディンさん(タデヨさんの姪)という若いカップルに続き、今度はオスカルさ

んの妹にあたる女性（サベリアナさんの姪）とタデヨさんの甥にあたる男性が1カ月半ほど前に家庭を築いたというニュースでした。ルガンド村では、ジェノサ被害者・加害者家族間にあ

った深い溝を越えて、他にも彼らのようなカップルが誕生しつつあるとのこと。今度ぜひ、ルワンダの新しい時代を切り開いていくそれらの若者たちから直接話を聞きたいと思います。

わたなべ

渡邊 さゆり

触れた手から

日本バプテスト同盟 日本バプテスト神学校教務主任
第二回「ルワンダ和解の現場・訪問ツアー」(2016年9月)参加。

みなさまこんにちは。2016年11月5日に大井バプテスト教会で行われた佐々木和之さんの報告会で、「ツアーの報告」のチャンスいただきました。

機内泊を入れて9泊10日の「和解の現場」訪問ツアーへの参加をおゆるしいたいただきましたことに心から感謝します。

ツアーを通じて、わたしが最も多く見るようになったのは、大好きになったルワンダ料理でも、「千の丘の国」と呼ばれるごとく、多くの丘でも、またバナナの木でもありませんでした。わたしが見るようになったのは、「骨」です。わたしは、骨が無念と悲哀を訴え続けていることを突き付けられました。骨がなお、泣き叫んでいる音が聞こえる感覚が今も残っています。

わたしたちは「償いの家」を建設するその家の持ち主になる被害者遺族の一人が公表される現場に立ち会うことができました。広大なバナナ畑のなだらかな傾斜の地に、男たちが集まっています。リーチのトレーニングを受けた加害者であった方がたが、被害者遺族であるエリックさんの家を新たに造ることが発表されます。ニヤマタ地域担当の副長であるエマヌエルさんが、わたしたちが立っていたバナナ畑のこの地域で、エリックさん(右写真中央)の父親が22年前に殺されたと話しました。この地域の人びとでリーチのトレーニングを受け、罪の意識を感じ、実際にエリックさんの父親の殺害に関与した人びとに、どこに埋葬したのが調査をした



そうです。証言から、すぐ近くに捨てられた遺体を発見することができ、エリックさんのお父さんの遺体を再埋葬した経緯が説明されました。

20代前半のエリックさんは、この集会の中で、繰り返し、こう言いました。「いまは、幸せです。わたしは自分の親のことを、この人たちから知らされます。心と家を壊されましたが、この人たちを今は自分の親のように感じます。この人たちから親を知るからです。わたしは幸せです」と。エリックさんは殺された父が人間として葬り直されることで、ひどい行いをやった人を目の前にして、「あなたがたをわたしの親のように感じます」と言われました。わたしは、本当だったら、もう二度と見たくないのでは、と思いました。しかしその人たちを通してでしか、自分の父を知る方法がなく、加害者となった方が

たが家を立てると決心したことによって、被害者遺族のエリックさんは光を与えられたと彼の表情や、言葉から知ることができました。二度と顔を合わせないで生きることが難しい環境で、強い衝撃がありながらも、そこで、出会い直すことの必要性を教えられました。

キレヘでは、償いの家を立てて住み始めたトマスさんが交通事故で召され、その記念の集会に参列することができました。加害者となった方と被害を受けたサバイバーの方が順番に証言されました。リーチのプログラムを受けた両者が、同じテントの下に並べられた椅子に座り、わたしたちを歓迎し、証と一緒に聞きました。家を立てるということが、「赦されて生きる」目に見えるプロセスです。その家に住むことは、「赦し続けて」生きることを選択した証だと知らされました。しかし、家を与えられた人が死んでしまいます。子どもたちが残されています。けれども、今は、孤独と恐怖に包まれた22年前とは違って、皆で話をきき、祈りました。もし、これが互いに分断され、憎しみと、敗北だけのままで、この日を迎えることになるのなら、どれほど深い引き裂かれが、生じたことかと想像を絶する思いです。ルワンダで起こったジェノサイドを、他のことからの比較や、置き換えて語ることはできません。しかし、その場に置かれたわたしたちは「では、あなたはどのようなか？」という問いに応える努力をする必要はあると思います。過去に起こったことを振り返らないままで、今と明日を築くことはできないと思います。わたしは、具体的には71年前にわたしたちが犯した深い罪による骨の叫びを聴く必要があると強く思いました。「和解」どころか、隠蔽、黙殺を繰り返し、家を立てるところか、壊し、再び戦いの配備を進めている現実がすぐ身近で起こっているのに、そのことを見ないで、行動しないまま、「ルワンダでのジェノサイドについて実際に見て、考えた」と言うことはできないと思っています。



お話の最後に、わたしはどうしても考えなければならぬと思われたことを、お話をさせていただきます。報告会に参加するにあたり、写真をいくつか見直しました。女たちがわたしの手を握っている写真が数枚あります。何人もの女たちが、わたしの手を握ったままでおられました。そのことを思い出して考えていました。サバイバーの女たちは、目の前で女たちがレイプされるのを見させられ、自らも暴行を被るといった経験をさせられています。女たちに向けられた性暴力の非道さに耐えることができません。わたしは、膣から槍をさされたままの遺体が安置されている場所を訪問しました。そのご遺体は「特別だから」ではなく、「特徴だから」そこに置かれ、訴えています。女だけが性暴力被害にあったわけではありませんが、圧倒的に女たちがレイプされた未、殺されていることを見過ごせません。殺す前に身体の一部を切り取り、レイプは当然とされたことを考えます。ジェノサイドが深い差別心からくるヘイトを増幅させ、隣人の存在、「生命(身体的)」のみならず、「いのち(全人的)」を破壊します。レイプは生き残る者をも、恐怖と痛みと屈辱で覆いこみます。レイプは、日常的な性差別の結果です。わたしたちの身の周りで、女性は「下等」で、人格的ではないものとして位置づけられるような形態をとっている場面があります。教会でも、学校でも、家庭でも、です。そこには、レイプの種類があります。ルワンダの女たちが外国からきた

私たちに触れ、そして、加害者の家族である女たちとも手を取りあっているのを見ました。触れることがいばん困難なはずなのに、です。この接触は、わたしは「もう二度と」という委託でもありと受け止めていまここに立っています。

最終日に、わたしは竹内緑さんにお会いして、現実には、トラウマに喘ぎ、発作的に自虐的になり、自傷行為が繰り返され、日常生活を維持することが難しい女たちが今なお、多くいると詳しくお話しをお聴きすることができました。しかし、どれほど女たちが卑しめられ、踏みつけられ、もう立ちあがることができないほどの痛手をおわされても、一方でもう一度誰かに触

れる、手をむすぶことを実践している女たちがいます。触れられたわたしたちは、NO MORE RAPE と、わたしたちの間にある性差別から覆す必要があると思っています。それが、いのちの叫びであり、このいのちの声にイエスの呻きを重ねて、わたしは聴きます。

佐々木和之さん、佐々木めぐみさん、そしてピアスの学生、リーダーシップをとってくださったセルジさん、リーチのプログラムを丁寧にくださったカリサ牧師はじめスタッフのみなさん、佐々木さんを支える会のツアーを提供してくださいました方がた、そしてルワンダで出会い、魂からの証言を繰り返してくださいました姉妹、兄弟に、神に、感謝します。

きたむら みづき
北村 美月

ルワンダ留学を通して学んだこと

東京外国語大学アフリカ地域専攻3年。ルワンダのPIASSで、佐々木和之さんのもと一年間学ばれた北村美月さん。2016年11月5日の佐々木和之さんの帰国報告会で、留学体験で学んだことを紹介して下さいました。

1年間のルワンダ留学を終え日本に帰国してから1ヶ月以上が経ちましたが、未だに何事も時間通りに進む日本の正確さに慣れずにあります。のんびりした町並み、1時間以上食べ物が出てこないレストラン、面識は全くないのにすれ違うときにあいさつしてくるルワンダ人たち、マーケットのおばちゃんたちとの値段交渉、笑顔で手を振ってくる子どもたち、そして何より大学の友人と先生方。ルワンダの何気ない日常がとても恋しいです。

ルワンダについてみなさんにお伝えしたいことはたくさんあるのですが、今回は日本人留学生として私が和解の現場を訪れて感じたこと、そしてPIASSの学生たちから学んだことについて書かせていただこうと思います。

佐々木先生の授業で和解について学び、和解の現場を実際に訪れて感じたことのひとつは、日本人にとっての「和解」、そしてルワンダ人にとっての「和解」がそれぞれに持つ意味合いの違いです。みなさんは「和解」という言葉を聞いて、何を思い浮かべるでしょうか？私が和解した経験として思いつくのは、友達や兄弟との



(写真中央、北村美月さん)

けんかの後です。その場合、「和解」というよりも「仲直り」という言葉の方がしっくりくるかと思うのですが、日本人にとっての和解は、友達と友達の間、兄弟間のことを指すことが多いのではないかと思います。また、仲直りと言っても、自分が悪いと思っていなくてもとりあえず謝ればいいし、謝られたら許さなければいけないというように、けんかの後の仲直りは日本ではまるで義務のように感じられます。

それに対し、ルワンダ人にとって「和解」というと、やはり虐殺後の被害者と加害者間のことを意味します。日本のようにとりあえず謝って、とりあえず許すというように簡単に済まされるようなものではありません。日本では、殺人事件が起きても、その犯人と顔を合わさずに生活することができます。しかし、ルワンダでは、近隣や今までで仲良くしていた人たちの間で殺戮が起き、今でも近所付き合いが深いということもあり、会いたくないからといってその人を避けて通るのは難しいという現実があります。そこで感じたのは、ルワンダ人たちが現実にはしっかりと向き合っているということ、そして、和解の難しさでした。授業で和解はプロセス、一步一步時間をかけて歩いていく旅のようなものであると勉強しました。もちろん、被害者と加害者同士が顔を合わせて会うということだけでも大きなことです。しかし、和解というのは1度謝って、赦しを請うだけで終わるものではありません。たとえ相手を赦したとしても、その和解をさらに深めていくという意味で和解への旅路に終わりはないのです。それをルワンダ人は一步一步着実に歩んでいる様子を和解の現場に行ってみることができました。

日本人であれば避けてしまうような現実と向き合い、前を向いて歩いていくことという選択をしたルワンダ人たちに「希望」を見せてもらいました。貧困に苦しんでいる、教育を受けられない子がたくさんいるなどの理由で、アフリ

カの人たちは私たちよりも下に見られています。かわいそうだから助けてあげなければいけない、私たち日本の技術を伝えてあげなければいけないというように、支援の対象として見られています。しかし、むしろ日本はアフリカやルワンダから学ぶことがたくさんあると私は思います。ルワンダ人の生き方や考え方を参考にすべきなのではないでしょうか。そのことを希望を持って生きているルワンダ人を見ていて強く感じました。



(PIASSの学生と2016ツアー参加者)

また、PIASSでルワンダ、ブルンジ、コンゴ、タンザニア出身の学生たちと関わって感じたのは、自国や周辺諸国の問題を真剣に考えているということです。私は日本の大学でアフリカ地域を専攻しており、大学入学当初からアフリカの問題に興味をもって勉強してきました。そして、ルワンダに渡ったあとも、実際に留学に行かないと分からないルワンダや隣国の問題を学ぼうと必死になっていました。しかし、PIASSの友人たちが自国の問題について知識が豊富で、それに対して自分の意見をはっきりと持っているのに対し、私は授業中に日本のことを聞かれても自信を持って答えることができませんでした。そのことがきっかけで、自分に近い問題から目をそらしていたことに気付かされ、日本のこともしっかり勉強しようと思うようになりました。また、私ばかりが学ばせてもらうのではなく、私という日本人がPIASSで

勉強することによってみんなにも何かを学んでもらいたいと考え、広島や沖縄に関する発表の場を設けてもらいました。

PIASSの学生と一緒に学んだもうひとつは、問題解決のために自分たちで何か行動を起こすことの大切さです。私も含め、日本の若者は、「自分たちは力不足だ」、「声を上げて聞いてもらえないし、何も変わらない」と思ってしまいます。しかし、PIASSの友人は、小さいことかもしれないが自分たちも何か力になれる、何か力になりたいと自ら行動を起こしていました。国境や個人の差異を越えることを目的にルワンダの周辺国の若者が集まる会議を開いたり、ブルンジの暴動に対する追悼としてキャンドルナイトを企画したりしていました。そのような友人たちを見て「希望」を感じましたし、「私も負けてられない、何か行動を起こさないと」と思わされました。

PIASSでの授業中、ある女性の先生が私たちにこのような質問をしました。「私たち人間はずっと争い合ってきたし、差別と偏見が至るとこ

ろに根付いているけれど、あなたたちはこの世界の未来をどう見ているの？」それに対して、多くの学生が「確かに問題はたくさんあるけれど、どれも少しずつ解決に向かっていくと思う。未来は明るい！」という考えを持っていました。このとき、私は同じく佐々木先生の同僚である先生の言葉を思い出しました。「僕はKazu（佐々木先生）と考え方がすごく似ていて気が合うけれど、どうしても『平和』に対する考え方だけは合わない。僕は、紛争はなくなると世界を悲観的に見てしまうけれど、Kazuは違う。彼はいつか必ず平和は訪れるとこの世界に可能性と希望を見出している。彼のそういうところを僕は尊敬しているんだ。」佐々木先生の平和に対する思いが、学生たちに伝わっていることを実感した瞬間でした。佐々木先生のもとで様々な国の学生たちが共に学ぶことによって、これからも平和と希望の環はどんどん広がっていくと思います。そのような環の中にいる若者が世界の平和のために活躍していくでしょうし、私もその中の一人になりたいです。

佐々木和之さんのドキュメンタリー 放送決定 NHK BS1 明日世界が終わるとしても

2017年3月16日(木)午後9時予定 (変更の可能性あり、要確認)

<http://www4.nhk.or.jp/P4231/>

事務局からのお知らせ

2017年、佐々木和之さんの帰国は11月だけです。
11月17-18日(金-土)、天城山荘(静岡県伊豆市)で
「第二回 平和と和解・宣教フォーラム」を開催します。

事務作業簡素化のため「振替用紙」を同封しています。請求ではありませんのでご了承ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

●佐々木さんを支援する会HP (ホームページ) <http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新。

●世話人会 加藤 誠(大井教会牧師)、中條智子(長住教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、
播磨 聡(広島教会牧師)